
魔理沙の奇妙な弾幕　ブレイジング　クルセイダース

文：DHMO 挿絵：各舞し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔理沙の奇妙な弾幕 ブレイジング クルセイダース

【Nコード】

N1007S

【作者名】

文：DHMO 挿絵：各舞し

【あらすじ】

八つ裂き兎氏主催、SS鍋祭りの灰汁とも言えないもので御座います。

笑って読んで下さい！

（前書き）

作者DHMOと友人各舞し氏の助力の元完成しました！
真面目に読まないで下さい！

かさかさとゴキブリの様に博麗神社の台所を漁る人影。服装からしてもまさしくゴキブリであるがそれはいいとして。その物音の発生源に博麗の巫女は素早く会心の一撃を繰り出し、どさりと人影は倒れ込んだ。

「……喧しい」

スパコーンとやけにいい音を響かせた頭を抱えた白黒魔女とひしやげたやかんを手に持った紅白巫女が今日も平和に過ごして……平和？ うん、平和。

「何すんだ霊夢……あいたた」

「それはこっちの台詞よ。人が昼寝してる時にガサガサゴソゴソ………ったく、目が覚めちゃったじゃない」

言い争いながら二人とも涙目で畳の間に行き、何時もの様にちやぶ台の上から茶菓子をつまもうとして紅白が気付いた。

「……私のお煎餅は？」

「お先に頂いいてええ！」

再び凶器と化したやかんを振るう巫女の姿は正に般若か修羅かオーガの如くだったそうな。衛星から監視される巫女とか何それ怖い。

「……で、一体何の用？」

霊夢がやかんのスペシャルパワー『暴打フォン』を使い『ガラクタ』に変化させて漸くした後、ボロ雑巾になった魔理沙に問い掛けた。

「その質問を待ってたけど、その前に怪我大丈夫？ とかごめんね？ とか謝罪の言葉位聞きたかったぜ」

「あんたにそんな事訊く位なら今から自販機の下の小銭探しでもした方がマシよ」

私への心配は小学生がもしない財宝を探す時間よりも無駄か、とは口に出さない。それとも本当に家計が逼迫しているのだろうか。

「で、どうしたの？」

「暇なんだＺＥ（キラッ）」

「表に出る封印してやる」

どこぞの歌姫をマネた魔理沙に今度はやかんの代わりに陰陽玉を取り出し振りかぶる霊夢。使い方が確実に間違っているであろうが当たればただでは済まない。

「冗談冗談……いやー、食料が無くなってしまったから少しいただきに来たんだぜ」

その返答に霊夢は疑問符を浮かべた。魔法の研究に夢中になり買い溜めた食べ物腐らせた魔理沙が食料を求めて里に這い出て来るのはよく見る光景であるが、博麗神社に糧食目当てに来たのは初めてである。

……普段から当てにされていない、と思うのだが。

「そんなの、うちも少ないのにあんたにやる分………」

みるみる顔を青くさせた霊夢は台所に文字通り飛んでいき、絹を裂いたような悲鳴を上げた。

遅れて魔理沙が立ち上がろうとするとツールギスもびっくりな速度で霊夢が掴み掛かる。

「あんた……冷蔵庫にあった魚肉ソーセージ……あれどうしたのよ………」

「あ、あれか？ 一本しか無かったからさつき食った「死ねえ！」どわあ!？」

ありのままさつき起こった事を話したら掴みあげられたまま鳥居に

投げ飛ばされた。

「うおっ、と、いきなりなにすん」だまらっしやいこの泥棒猫！」
へぶあ！??？」

若干間違った意味で使われた言葉と共に放たれた陰陽玉は魔理沙の腹にクリーンヒットした。

> i 2 0 5 0 3 — 2 8 0 9 <

「私の晩御飯を……折角拾ってきたものをあんたわあああ！！」

「え、あれ拾いものかよ」

道理でやけに土臭いと思ったぜ、と口の中で呟きつつ立て掛けてあった箒に乗り霊夢の針をかわす。

「避けるな！」

「む、ちゃ、を、言うなッ！ 恋符『マスタースパーク』！」

ミニ八卦炉から放出されたビームを難無く受け止めた霊夢は自らのスペルカードを構える。

「ちょ、今当たってただろ！ なんで……」

「うつさいわね、これ位出来なきゃ博麗の巫女なんてやってらんないわよ。神霊『夢想封印』」

「またもや陰陽玉の強襲。今度はキチンとグレイズするが、避けた先には既に霊夢が手を打っていた。」

「ぐツ！？」

弱目の結界。だが避ける事で精一杯だった魔理沙の動きを止めるには十分な威力だ。

「かかったな、アホがッ！」

サンダークロスブリットアタック
稲妻十字空烈刃！

「ウボアアアア……！」

手刀の一撃が入り筈から落ちた魔理沙に霊夢が追撃をかける。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラ、オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラーッ！オラアアアアアアアアアア、オラオ
ラオラオラオラオラ、オラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラーッ！！」

最早スペルカードルールを無視して殴打を繰り返している。これにはスタンド使いも苦笑い。

「ぐ……おおお！」

「魔理沙あああーッ！君がッ！泣くまで！殴るのを止めないッ！」

明らかに、明らかに漫画を読んだ影響であろう霊夢の顔は心なしか

劇画調であつた、と後に魔理沙が語っている。

やがて両者が地に落ち、土埃が晴れるとそこにはジョーモ^{ゲフンゲフン}デル立ちをする霊夢と横たわっている……

「これは……ッ!？」

ボロボロになっていた紫であつた。その時、上方から膨大な魔力を感じて空を見上げると辛うじて、スキマに足を掛けた魔理沙がラストスペルを宣誓した姿が見えた。

「魔砲……ファイナルスパアアアアクツツ!!!」

数時間後、妹紅の屋台。

「まつさか……この私が偽者に気付かないなんてね……」

若干焦げたりボンを弄りながら霊夢が溜め息を吐く。その様子を見て隣に座ってる魔理沙がバンバンと肩を叩いた。

「まーお前もふつーの人間だつたって事だぜ! もこー、皮とネギマまだか?」

「ハイハイっと、お待ちどーさま」

僅かな博麗神社の賽銭を握り締め魔理沙は喜んで奢られ、霊夢は覗き見していた紫を呪いながら奢らされていた。

「ハア……明日から慧音にでもお世話になろうかしら」

「大丈夫、次は私が奢るぜ」

「嘘だ！ それは絶対嘘だ！」

……何だかんだ言っても、やはり平和に過ごしているのであった。

「……紫様、何やってんですか」

草木も眠る丑三つ時になり本堂の裏手に棄てられた紫は漸く式の藍によつて発見された。

「藍……私、今日から覗きは止める事にするわ……」

「はいはい、寝言は家か老人ホームか土に還つたら言つて下さいね」
幻想郷のマーシーと名高い八雲紫が一瞬だけ真人間になった瞬間であつた。つか妖怪だし。

（後書き）

……いやはや、自分が書くとネタが入るのは自明の理ですな。
クスリと笑って頂ければ満足です。

読了感謝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1007s/>

魔理沙の奇妙な弾幕 ブレイジング クルセイダース

2011年5月21日09時08分発行